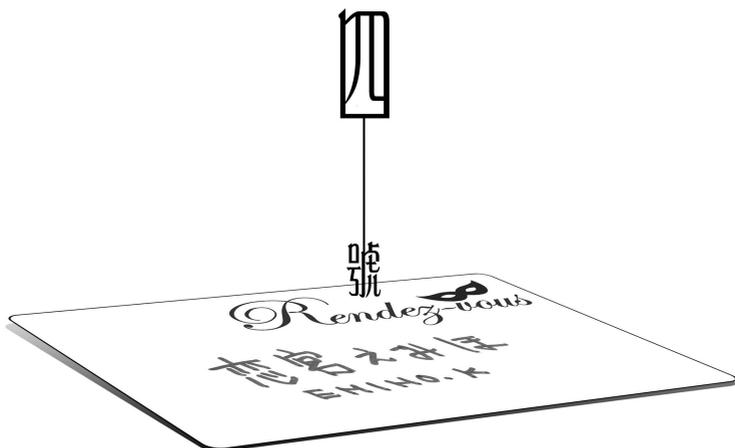


# 非実在 ~Airmys~ 探偵小説研究会

エアミステリ



エアミステリ研究会

# 非実在探偵小説研究会 4号 目次

## 企画

企画1 お題競争「○○を読んだ男」

わたしだけが知っている——綾辻行人を読んだ男

飛鳥部勝則を読んだ男

霧舎巧を読みまくった男共

泉水館第四の秘密——あるいは倉阪鬼一郎を読んだ男

乾くるみを読んだ男      乾くるみ症候群

北山猛邦を読んだ探偵

酩酊輪舞      西澤保彦を読んだ男

企画2 マイベスト黒後家蜘蛛の会

## 読み切り短編

「泣き女の呼び声」

麻里邑圭人……………6

皐月あざみ……………45

光田寿……………51

根暗野蜜柑……………71

佐倉丸春……………93

田中大牙……………106

紫藤陽花……………115

……………149

方功鉄文……………165

表紙・扉ページイラスト

ウスダアヤ

# わたしだけが知っている——綾辻行人を読んだ男

まりむらけいと  
麻里邑圭人

## ●主な登場人物

「（ ）内の数字は、二〇一〇年八月時点の満年齢」

- 藤堂 玄一郎 ……………「迷宮館」の主人（54）  
藤堂 麻衣子 ……その娘。K大学工学部二年生（20）  
氷室 哲哉 ……………同大学法学部三年生（21）  
舞名 敬介 ……………同大学医学部三年生（21）  
佐倉 史明 ……………同大学経済学部二年生（20）  
麻生 香織 ……同大学文学部三年生。佐倉の恋人（21）  
喜多山 かなえ ……………「迷宮館」の使用人（45）  
三田村 恵梨子 ……………香織の友人（21）  
内田 博行 ……………恵梨子の元恋人（27）  
和泉 洋平 ……………小学生（6）

※この作品では、綾辻行人『迷路館の殺人』の真相に触れている部分があります。未読の方はご注意ください。



今思えば、あの時、恵梨子を見かけたのは運命だったのかもしれない。

初めて来た町で職場の同僚と飲んだ帰りに偶然、見覚えのある栗色のポニーテールを見つけたのだ。

最初、恵梨子の姿を見かけた時、声を掛けるべきかどうか躊躇した。脳裏に彼女と最後に会った時の光景が滲むように浮かぶと同時に、胸の奥に微かな痛みを覚える。

……

そうしてあれこれ思い悩んでいるうちに、いつの間にか彼女の姿は雑踏に紛れて見えなくなっていた。

\*

恵梨子から電話があったのは、それからちょうど一ヶ月後のことだった。

博行に相談したいことがあるの、と二年ぶりに電話をかけてきた恵梨子が酷く思い詰めた声でそう言ってきた

のに対し、僕はさほど悩むことなく了承した。

もともと頼まれたらイヤとは言えない性格なのは自覚していたが、それに拍車をかけたのは先日、彼女に声を掛けそびれたせいもあったのかもしれない。

そうして改めて彼女と再会したのは、その翌日の今日——八月二十九日、日曜日の昼のこと。再会の場として彼女が指定したのは、僕も馴染みのある地元の喫茶店『E』だった。この店は普段から客があまりいないので、相談事をするなら打ってつけの場所と言えるだろう（とはいえ、こういう状況が頻繁に続く他人事ながら心配になつてくる）。

曇りガラスのドアを押し開けて、香ばしい珈琲の薫りとひんやりとした冷気が漂う店内へと足を踏み入れる。ハンカチで額の汗を拭いながら、聞き覚えのあるクラシック音楽が静かに流れる狭い店内を見回すと、窓際の奥まった席に座っている恵梨子の姿を見つけた。

僕が恵梨子の姿を認めると同時に、恵梨子の方も僕がやつて来たのに気付いたようだ。こちらに向かつて手を振ってくる。

「……ごめん、遅れた」

恵梨子の前に座ると、僕はまず遅刻の非礼を詫言じた。

店内には相変わらず客が少なく……というか、僕と恵梨子以外に誰もいないので、ちよつとした貸し切り気分だ。

人形のように整った顔立ちのウエイトレスが水を運んできたので、僕はすかさずコーヒーを注文する。

「ううん、そんなことはないよ。私が単に早く来すぎただけだから」

僕は、恵梨子がつこりと微笑むのを見て「思ったよりも元氣そうで安心したよ」と言いかけたが——よく見ると彼女のぱつちりと開いた目の下にうつつらと隈くまがあるのに気付いて、慌ててその言葉を呑み込んだ。

「ん？ どうしたの？」

「……いや、別に。それより今は何をやってるんだ？」

「二年前と変わらず、今も薬学部の学生をやってるわ。」

お陰様で単位の取りこぼしもなく順調そのものよ」

「そっか」

僕は一人頷くと、おもむろに持参したシガレットケースからタバコを一本取り出した。それから「今日の本」と呟き、口にくわえたところで——恵梨子が何か言いたげな顔でこちらを見ていることに気が付く。

「……何？」

「タバコ、吸うようになったんだ」

「ま、まあね。あ、吸っても大丈夫かな」

「別に大丈夫だけど……」

「けど？」

「私と付き合ってた頃は、タバコを吸う奴の気が知れないみたいなことを言ってた人が、再会したらタバコを吸うようになってたなんて、どういう心境の変化かしらと思つて」

「そ、それは……」言い淀む。「まあ、色々あったんだよ、色々」と

「色々、ねえ」

恵梨子が疑わしげに僕を見る。

心臓の鼓動が一段と高鳴るのがはつきりと分かった。

（もしかして、恵梨子は気付いているのだろうか？）

勿論もちろんその可能性も決まるとは言えない。だが一方で、人の家に置いていったもののことをそこまで覚えているとも思えない。

（『置いていった』ということは、すなわち、恵梨子にとつてそれが『大したものじゃなかった』ということ。だから恵梨子が覚えてるわけがない！）

僕はそう自分に都合よく解釈すると、気を取り直して

ライターでタバコに火を点けた。

立ち上る紫煙。一時の沈黙。

僕が何か言おうとするよりも先に、恵梨子が口を開いた。

「いっぴになく冷ややかな口調で「もしかしてそれ、島田しまだの真似まね？ だったら似合ってないからやめた方がいいよ」

「……ははは、な、何を言ってるのか、よく分からないなあ」

多分、その時の自分の顔を鏡に写したら酷く引き吊っていたことだろう。

恵梨子のその言葉は、どんな鋭利な刃物よりも深々と僕の心突き刺さる。

(やっぱり気付いていたか……)

2

島田潔は、ミステリ作家・綾辻行人あやつじゆきとが創造した探偵役の一人だ。一九八七年にデビュー作『十角館の殺人』で登場して以来、二〇一〇年八月現在までに八作出ている『館』シリーズで活躍する彼は「タバコは一日一本」を

信条とし、今の僕のようにシガレットケースを持ち歩いては「今日の一本」を美味そうに吸ってみせる。……そんな彼に惹かれ、その一挙手一投足を真似するようになったのは、もとはと言えば彼女——三田村恵梨子のせいだった。

今でも、忘れはしない。

好きな人ができたの——まるで明日の天気の話でもするかのようなさりげな目で、そう別れ話を切り出した恵梨子。それは当時、公務員採用試験に受かったばかりで浮かれていた僕を一気に絶望の淵へ叩き落とすには充分すぎるものだった。そして、啞然とする僕に幾つかの置き土産を残して、彼女は立ち去った。その中に件の『十角館の殺人』も含まれていた。

『十角館の殺人』を読もうと思いついたのは、一言でいえば生来の貧乏性からだった。普通なら元彼女の所持品などさっさと捨ててしまおうところだろうが、いざ捨てようとしたところで貧乏性からくる「もったいない精神」が発動。どうせ捨てるなら読んでからでも遅くはないだろう、と思った僕は一旦手にしたゴミ袋を脇に置くと、コーヒー片手に読み始めた。

……それからのは、多分一生忘れられないだろう。

貪るむさぼるように読んだ。コーヒーを飲むことも忘れて、ひたすら物語に没頭した。世の中にこんな面白い本があったとは思わなかった。謎の死を遂げた天才建築家・中村青司なかむらが残した、孤島に建つ異形の館『十角館』。そこへやって来た大学のミステリ研メンバーを襲う謎の連続殺人。外界と一切連絡が取れない中、一人、また一人と犠牲者だけがが増えていく。高まる緊張感と手に汗握る興奮。一体誰が犯人なのかと逸るはや気持ちを抑えながらページをめくっていくと、やがて待ち構えていたのは世界が崩壊するような衝撃の事実と、言葉では言い表せないカタルシス――。

勿論そんな体験ができたのは単に自分がミステリらしいミステリを今まで読んだことがなかったからというものもあるだろう。とはいえ、僕が作家・綾辻行人にハマる理由としてはそれで充分だった。

翌日、僕は『館』シリーズの作品を求めて本屋に走った。その時の僕の心境は、正に砂漠でオアシスを見つけた旅人のそれだった。『水車館の殺人』『迷路館の殺人』と食るように『館』シリーズの続刊を読み漁り、正味三日かけて当時出ていた『館』シリーズ全作を読破した僕は、続いて『館』シリーズ以外の綾辻作品にも手を伸ば

していき……そうして全作品を読み尽くした頃には、作中の名探偵の真似までするくらいの熱狂的なファンになっていた。

\*

(……今思えば恵梨子が『十角館』を置いていったのは、僕をハメるためだったんじゃないだろうか?)

そんな被害妄想めいた考えが脳裏をよぎる中、恵梨子が「それはさておき」と話を切り出す。

「今日博行をここに呼び出したのは他でもないわ。博行にどうしても相談に乗ってもらいたいことがあるの」

「……その前に一つ確認したいんだが」

僕は恵梨子の顔を真つすぐ見据えると、わざと皮肉つばい口調で言った。「その相談とやらは昔捨てた男に頼るほどのものなのかい」

「そ、それは……」

今度は恵梨子が言い淀む番だった。申し訳なさそうに目を伏せて

「その節は悪かったと思ってるわ。でも、今の私に頼れる人は博行くらいしかいないの」

「それは嘘だね。だって君には僕を捨ててまで一緒になつた彼氏がいるじゃないか」

「嘘じゃないわ。ホントのことよ。彼とは別れたの。いえ、むしろ捨てられたと言つた方が正しいかしら」

「え……」

「ちょうど半年前のことよ。買い物に出掛けた街角で偶然、彼の浮気現場にばつたり遭遇したの。私とよく似た女と仲良く腕を組んで歩いていて……その時はあまりのシヨックに呆然として声を掛けられなかつたけど、後日意を決して彼にそのことを問い詰めたら、彼、拍子抜けするくらいあっさりと言ひを認めたわ。しかも悪びれるどころか、こう言つてきたの。前から考えていたけど君とはもう限界かもしれない。君の顔は好みだけど、その嫉妬深い性格が俺には合わないんだ。その点、彼女は顔、性格共に正に理想的な女性と言つていい。欠陥品である君とは大違いだ。だから別れようつて。これにはさすがの私も絶句せざるを得なかつたわ。そして呆然として私の前から立ち去ると、それつきり二度と姿を見せなかつた。……ね、どう見ても捨てられたとしか思えないでしょ？」

「……」

それに対し、僕は何も答えなかつた。確かにこれは恵梨子が絶句するのも仕方ない、酷い言い草だと思う。……だが、それはまんま恵梨子がかつて僕に言つたのと同じものだ。

そのことに恵梨子も思い当たつたのだろう。「あの時はごめんさい」としおらしい声で謝つてから

「でもね、そうして一人になつたことで、私ようやく気付いたの。今まで私を心から必要としてくれた人は博行しかいなかったつてことに。勿論、これが虫のいい話だつてことは分かつてゐるわ。救いようがない奴だと見下してくれたつて構わない。でも、私にはもう博行しかいないの。だから、博行に断られたら私、一体どうしたらいいか……」

そして、後の言葉は嗚咽おえっによつてかき消される。

卑怯だ、と思つた。これが全て計算通りだとしたら、見事としか言いようがない。こうなつてしまつたら、もはや僕に選択肢はないも同然だつた。

**続きは「非実在探偵小説研究会4号」でお楽しみ下さい。**



---

## 非実在探偵小説研究会 ～Airmys～ 4号

発行日 2012年11月18日  
発行 エアミステリ研究会  
連絡先 [airmysdj@gmail.com](mailto:airmysdj@gmail.com)  
<http://www43.atwiki.jp/airmys-dj/>  
価格 720円  
印刷所 株式会社ポプルス

### Special Thanks

編集作業をお手伝いして下さったエアミス研有志メンバー